

村野次郎創刊

香蘭



2024年(令和6年)4月号

第101卷

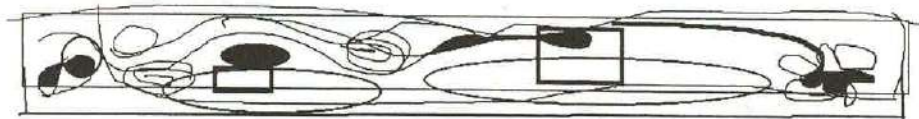
第4号

通卷1120号

二〇二四年(令和六年)四月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇一卷第四号



香 蘭

2024年(令和6年)4月号
第101巻 第4号 通巻1120号

目 次

村野次郎作品 私の愛詠歌(104) 牧野道子 : 表二
 近詠十五首 山茶花 江口絹代 : 2
 作 品 1

推薦香蘭集 三
 香 蘭 集 二

作品一 十首選(二月号) 高島 憲子選 18
 作品二・三 十首選(二月号) 丸山三枝子選 16
 一頁公論(35) 最近出合った言葉―「言葉の井戸」 15
 村野次郎への旅(168) 昭和期の「香蘭」(二二) 20
 「香蘭」とともに(6) 寛大だった「時代」 28
 続・酔風船(4) 酒の自叙伝(一) 29
 エッセイ・自由研究 宮沢賢治の短歌、詩 42
 焦 点(二月号) 人間関係を詠んだ歌 44
 七首 抄(二月号) 46
 篠永路子「見る」評(二月号近詠十五首) 47
 作 品 評(二月号) 48
 作品一 47
 作品二 48
 作品三 50
 香蘭集 54
 飯島・加瀬・中島(由) 56
 田中あさひ 60
 長澤ちづ 62
 近藤 純 68
 相川・富田・大里・大塚 46
 伊藤美恵子 44
 和田羊子 42
 和久幸子 29
 鈴木桂子 28
 千々和久幸 20
 斎藤俊子 15
 斎藤 俊子 15
 千々和久幸 20
 鈴木桂子 28
 千々和久幸 29
 和田羊子 42
 和久幸子 42
 伊藤美恵子 44
 和田羊子 44
 伊藤美恵子 44
 和田羊子 44
 伊藤美恵子 44
 和田羊子 44
 伊藤美恵子 44
 和田羊子 44

緑 地 帯 56
 耳言あれこれ(28)「とふ」「ちふ」「てふ」について 60
 明宝研究会第一四八回 一月例会 明宝研究会 会員作品批評 62
 他誌拝見132 68
 歌会及び会合・会員消息・他 74
 編集後記・新宿日記 74
 表紙絵 山口 蓬春「桃」 74
 目次・緑地帯カット 和田 和雄

癒えて帰ればまひる明き家の中

はづみをつけて時計鳴りをり

『楞風集』

『楞風集』を開くと最初のページに、昭和十年とあり、そのあとに小題〈病後閑居集〉として十二首が並び、その四首目の歌。

先生41歳の働き盛りの入院で家をあけ、退院後に自宅に戻られた感慨がしみじみと詠われている。一首目に〈われ病みて留守にせし家垣根には山茶花すぎて桃咲きいでぬ〉があるので、かなり長い闘病であったようだ。健康な日々には感じられない平凡な日常が、病を経験した身には輝いてみえてくる。この一首、下句の〈はづみをつけて時計鳴りをり〉が特に印象的だ。

帰宅した部屋の柱時計がボンボンと昼に鳴りだし「退院おめでと〜」と語りかけてくる。時は春、日差しも伸びて明るさの増した真昼の我が家、何時もの柱時計の音もなぜか弾んで聞こえる。仰ぐ空も澄み渡り、病癒えて安堵する村野先生のお姿が生き生きと立ち上がってくる。年譜にはこの年北原白秋、香蘭顧問を辞退すとある。

四 選 者 の 作 品

手は離すなよ 平塚 千々和 久 幸

ルーチンに従い堅気でいることもなにか煩わし寒桜咲く
忙しく生きて何ほどのことやある棒に当たらぬ犬もあらんに
ミストでも味噌つ滓でもかまわぬが一度握った手は離すなよ
とりあえずここらで今日は手を打つかいっただって同じ星ばかり見て
酒を飲むほかにさしたる話なく子を帰したりこれでよかつたか
声揃え派閥解消をまた唱うバカは一つが覚えられずに
アメリカンコーヒーを飲み別れきつ夕暮るる街見下ろしながら
妻あらぬことは忘れて酔い痴れて滅びの美学説きてありしか
しじみ鍋 東 京 桜 井 京 子

冬の雲ながれて行きてすがしもよ自己肥大とは無縁なる雲
くりかへし嘔吐してゐる寒の夜わたしはどこかで間違へたのか
いっただつて信じてゐるよ朽ちてゆく銀泥の葉のしろき裏がは
ただ青く高いだけの冬ぞらに花梨がひとつ木守りの花梨
あの人もこの人も死んでしまつたねえしじみ鍋つくる寒の夕べは
正月に墓に詣でる慣ひにてをさなも小さな頭を垂れぬ

おひとりさまよき響きにて案内さる冬陽があたる窓ぎはの席
泥水のなかの小石を拾ふのが私の役目か拾つてゆかう

白き水仙 横 浜 渡 辺 礼比子

受付に呼ばれるたびに腰浮かす ワタナベさんはどこにでもいて
あらたまの逆三日月の背に寄り激しく光る明けの明星
日々曲がる角の家なる山茶花の華やぎも見つ散りゆくも見つ
癌病めどいつも機嫌のよき夫が坂本龍一の訃報に黙す
天袋の古日記入り段ボールついに自力で下ろせずなりぬ
仇とも思いし人とハグしおり 冬ふかく咲く白き水仙
用ありというにもあらず青信号点滅すれば迷わず走る
ワイキキやパリにはあらず行きときはスーパードという歩けぬ人が

どんどの炎 鎌 倉 高 島 憲 子

権五郎神社のどんど焼に來ぬ忙しかりし年を行かせて
天災に始まる年のこの厄をどんどの炎よ払ひたまへな
悩むための時の間無ければそれでよし人に知られず返り花さく
紅梅の色をめでつつ柏手を打てば社の空気のふるふ
福祿寿の面に今年も会ひに來ぬいつ見ても東野英治郎なる
坂下の路地よりほんの数センチのぞくは藍の海のわき腹
汐祭すでに終へたるこの海の藍のいろあひ一段と濃し
「あれはどこ」「それはそこ」と言ひ合へるシニア夫婦に新年が来る

作品一 十首選



(二月号作品から)

高 島 憲 子 選

・この人が居ても居なくとも日は昇るさは言え昇る日に嫉妬して

千々和久幸

嫉妬という、人間の不変の心理をモノローグのように飄飄と詠む。この人って誰かと、そこからぐっと引き入れてくる。おそらく、作者自身。自分が居ても居なくても、日が昇るといふ自然の摂理は変わらない。悠久の時と人間の時間の短さと。そこを言わずに悟らせてくる。火時計、という作者の歌集名を思い出す。身中にいつも火を燃やし何かに抗っている作者は、昇る日にさえも嫉妬する。

・秋たけて家族も他人と思う日は言葉つつしむバビペポボ

丸山三枝子

四句までは、しつとりとした内省的な歌として読める。家族も他人。なんともシリアスな言葉で、誰も心がちくちくと疼く。ところが、結句の破天荒なオノマトベに、一気に一首の表情が変わる。家族だから他人より余計、気を遣うこともある。慎んでも、時に言葉は武器となつて怖いもの。でも、「バビペポボ」というおまじないを唱えれば、もう何でも平気になる。あるいは、言いかけた失言をこのおまじないが消してくれるのかもしれない。オノマトベの生きた、忘れ難い一首。

・かもめ橋わたつて次はつばさ橋むかうに光る海が見えり

桜井 京子

心惹かれる橋の名前が並ぶ。作者の住まいの周辺の固有名詞のようだ。土地に詳しい方なら、具体的な光景が見えるのだろう。作者名がわからず、どこで詠まれたかという背景を取って読んでみる。すると、ファンタジックな世界がぐっと広がって、さらに魅力あふれる歌になつてくる。かもめ、つばさ、という言葉のイメージと、その先に光り、広がる海の景とともに、明るさやときめきの気分が伝わってくる。叙事と叙景のみのシンプルな構成ながら、果てしない世界がずっと続いていくようだ。ひろびろと胸のすく歌。

・恋人と「となりのトトロ」の映画観て愛告げしのち帰路にて死せり

石井 雅子

連作より、この帰路で不慮の事故に遭われたのは作者の甥御さんとわかる。デートからの告白。それを無事終えての出来事。お若い方の死を心より悼む。のこされた親や周囲の人々、とりわけ、恋人は小説や映画の中の出来事であつてほしかったに違いない。今なお世界中で愛されている不朽の名画、「となりのトトロ」。対比が切ない。連作に詠まれた挽歌。どうぞ、魂鎮めとなりますように。

・抜きませぬ親不知でも」の歯科医なり三十年のわがかりつけ

市川 義和

私事ながら。夫の祖母がまさに、この通りの歯科医に通つていた。歯科診療には不案内だが、抜歯の方が手間が無いのかもしれない。大義母のかかりつけ医も「親不知のような一見役に立たない歯でも、ブリッジ等が必要になるから抜かない」という主義。この作者の長年のかかりつけ医も、患者の歯一本一本を大切に扱う信頼できる医

師なのだろう。思わず、似たエピソードを想起した。この貴重なお医者さんの存在が作者の健康を守る。一首に人生のエピソードが凝縮した。会話体の上手な取り入れや、簡潔な言葉選びが奏功。

・夫と娘の遺影の前に今朝もまた三人揃い朝茶を啜る

伊藤美恵子

香蘭読者は、この作者が相次いでお身内を亡くされたことは、ご存知である。次々と心打つ挽歌の名歌が誌上に生まれ、読者は作者と一緒に瞑目し故人を悼んでいる。今もって作者は、日々、三人で暮らされている。三人揃い、と詠めば、三人が揃う。それが言葉というものだ、この一首が教えてくれる。挽歌のもつ力。

・あざやかに飛行機雲の伸びゆくを師走の街に人ら気づかず

井上 哲子

空はいつも我々の頭上にありながら、ゆっくり眺める人はどれだけいるだろうか。かく言う筆者もその一人、最近、空を見ていないなあ、と反省しきり。まして、師走の忙しい街路を歩く人びとはなおさら。この作者は、大切な心のゆとりをお持ちなのだ。師走の空。きつと空気も澄んで、青空に鮮やかな白の航跡が見えたことだろう。

・手作りの甲冑纏ふ武者の列華やぎ進むけふの絵空事

岩田 明美

時代祭などで、手作り甲冑の武者行列を見ることがある。昔の鎧、兜の緋の色は赤や緑の糸を使い華やかである。華やき進む、にその色合いや、旗差し物などがなびく様も目に見えてくる。結局で、けふの絵空事、としたことで、急に現実に戻る。しばし、作者もその時代に引き込まれていて、そうか、これは絵空事であったよ、と我に返ったのか。あるいは、これはとても絢爛とされているけれど、絵

空事ですすよ、という醒めた目からの物言いか。この一首からは、後者に解釈した。結局が答になってはいけないが、この場合、結局が一首の核で、必要不可欠。実際の昔の戦なんて、こんな華やかな祭ではない、とのシニカルな目がある。

・逆らはず生きるは易しか雨風に大きく揺るる黄のガーベラ

大井田啓子

上句に思いや疑問を、下句に具体的な景を入れ、イメージを印象深くしている。易し、とすれば定型におさまるが、作者はあえて、「か」を用いて疑問を投げかける。一般に、人や物事の流れに逆らはない生き方が無難とされるけれど、本当にそれで生き易いの？と。読者への問い、そして自身への問いであろう。雨風に大きく揺れている黄のガーベラ。その景からの想念とも、自己の思いを景に描いたとも読める。風雨に身を揉むガーベラに考えさせられた。

・葡萄の美酒夜光の杯に酔い痴れし今宵よくまあ帰りに来たれる

渡辺礼比子

初二句に聞き覚えがあり、調べてみた。高校の教科書の漢詩篇等に出てくる、王翰の七言絶句の一節。本歌取りといえは、よく知られた先行の和歌を元にするものだが。このように漢詩から、という場合もあることを学んだ。本詩は唐の時代、宴の後、砂漠の戦に征った兵士の殆どが還らなかつた、というシリアスな内容。ところが、この作者、今宵の（多分、豪華な）宴会から、よくまあ、無事生還したもののよ、とユーモアを交えて詠嘆している。四句に口語を入れたところにも、機知と諧謔のセンスが光る。本歌取りの妙味、文芸のもつ奥深さを知らしめる一首。

作品二、三 十首選



(二月号作品から)

丸山 三枝子 選

作品二

・事故に遇い両足人工股関節 両手使えることの幸せ

大島 昌子

事故で不自由になった障害、枷を克服して暮らしのこと熟し、作歌に打ち込んでいる作者である。自由な両手があることは「幸せ」だと言いつけるまでの長い歳月の辛苦や煩悶が偲ばれる。「両足」に呼応する「両手」。作者は昨年暮れに、右足の二ヶ所を骨折して3月は休診、現在入院中なのだが、4月号に次の詠草が届いている。(へ賜りし時間と思ひ病室で短歌、編み物して反省す)。どこまでも前向きの作者が窺え、ホッとしつつ襟を亂される思いである。

・母や子の気になることはあるけれど今、人生のゴールデンタイム

小笹岐美子

この歌の前に置かれている歌は、(フェアイティングポーズとる人褒める人分析する人 歌会楽し)で、歌会や作歌が楽しくて仕方がないという風情である。この号のエッセイの「酔風船飛び交う」では、(スランブで歌がでない、などと口が裂けても言うまいと思う)と述べ、こざれいに纏まった歌を超えることに腐心しているようで、

作歌へのただならぬ意欲と関心が窺える。家族のことではいろいろと心配はあるけれども、それはそれとして、短歌に魅せられ視野を広げている今の「人生のゴールデンタイム」を完全燃焼したい、と思っているのだろう。

・浅葱斑の従妹のやうな蝶々きて藤袴の蜜をふるへつつ吸ふ

田中あさひ

長旅をする浅葱斑の好物は藤袴の蜜。作者は庭に藤袴を植えて浅葱斑の到来を待っていたようだが、その浅葱斑は現れず、「浅葱斑の従妹のやうな蝶々」がきて蜜を吸っていると言う。作者には浅葱斑か、そうではないかの判別ができるのだろう。面白いのは「従妹のやうな蝶々」の比喩である。姉でも妹でもない、それより少し速い従妹のような浅葱斑。結句からは蝶々への作者のやさしさが匂う。蝶々は生きてゆくために必死で蜜を吸っている。

・嘘っぽいドラマ承知と観ておればいつしか見せ場に怒りと涙

藤本佐知子

いくぶん自虐的な下句にクスツとさせられる。この辺りが嘘っぽくて興ざめだな、などと観ているうちに、どんどんドラマの内容へのめり込んでゆく「我」がいた。そんな「我」に一寸ばかりあきれ、自らを揶揄する作者に好感を覚える。

・匂いたち太る花梨を「マルメロ」と呼べば異国の青空深き

安田 恵子

自分の心象や日常身边を詠まない異色作と読んだ。とてもエキゾチックな世界が造形されており、感覚的な歌である。街路でよく見かける花梨に「マルメロ」と呼びかけたときの作者の感覚がいいなあ

と思う。ポルトガル語の「マルメロ」がいいのだ。花梨の果実は甘酸っぱくて香気がある。ここでは下句への転換の妙を味わいたい。日本の青空はポルトガルの青空に繋がっている。

作品三

・運転手と車掌の名前告げながら大井町線多摩川渡る

内海 恭子

大井町線に乗ったことはあるが、運転手と車掌の名前を告げるのは聞いたことがない。この習慣は観光地でのこととして聞いたことはあるが、一読思わず立ち止まった。多摩川に架かる橋を今し渡っている大井町線が鮮やかに見えてくる。報告の歌と言えなくもないが、こんな臨場感ゆたかな報告の歌ならば歓迎である。上句に電車の窓外の風景を配した歌はありがちだが、運転手と車掌の名前が新鮮に響いてくる。

・夕暮の湖面を染める茜色我をも染めて山間に果つ

奥田 富栄

松江の奥田さんの歌だから、これは宍道湖の「湖面」であろう。宍道湖のほとりに立っている作者をも染めて夕日は遠くの山間に沈んでゆく。近景から遠景へと広がる夕景のなかに作者も佇んでいる一枚の絵が思われる。我的心も全身も茜に染まっているようだ。「我をも染めて」の自愛の隠る趣がいいではないか。ここでは四句の「我をも染めて」が一首の核としてよく働いている。落日を見納めて帰った作者かも知れない。

・天気予報画面の夜空をゆっくりと星に見紛う飛行機過る

菊地 篤子

実況中継での珍しい瞬間が掬われている。テレビのこんな光景にはなかなか恵まれない。その瞬間を見逃さなかった作者なのだ。歌の素材を掬う歌人のアンテナでもある。三句「四句は、ゆっくりと飛行機過る」と繋ぎたく感じた。「ゆっくりと飛行機過るを星と見紛う」くらいで如何だろう。

・もういいよ誰とも競争しなくても落葉の山道ゆっくり登る

佐伯 弥生

好むと好まざるとに問わず、今の現状で生きてゆくには競争にならざるを得ないことが多く、そんな現実から逃れたいと思いがながら日々生きている。漱石の「草枕」ではないが、とかくこの世は住みにくい。そんな前提から詠まれた歌で共感した。上句の眩きのような、呼びかけのようなフレーズで立っている。三句切れの歌と読んでもいいし、そう読まなくても、下句の情景描写に自然に繋がる巧みな歌と読んだ。競争世界から逃れて「落葉の山道ゆっくり登る」ひとときの安息。

・運転をやめると決めたその日から私はすし空に近づく

中島由美子

高齢に近づき、「運転をやめると決めた」のだろう。その解放感が下句に述べられている。結句の「空に近づく」は、運転中の視野が高く広くなったとの意味で、この結句の広がり、高い詩の世界に手をかざしている。「空に近づく」は、作者の詩へのあこがれであるかも知れないし、誇り高い矜持であるかも知れない。本社歌会や明宝研究会に熱心に参加する作者の意欲も買いたい。

山茶花

江口 絹代

庭隅に紅色づきし山茶花のほつりほつりと咲き始めたり

運転手の数が足りない 定刻にバス待つ我に白き雨降る

ひとつことあきらめし後人参をみじん切りしてまぜご飯炊く

わがそばにしんと座れる黒猫のひたいのあたりが亡き夫に似て

着ぶくれて冬の陽を浴び我と猫ふたりながらに年老いてゆく

喪服着て過ぎし日々の過ぎゆきぬ遠くに白くけふる山茶花

もうよその家族が住み居るマンションの前通り過ぐクリスマスの日

サクサクと音する方に目をやれば尉鷗一羽霜柱踏む

藤井聡太似のバイトのおりて駅前のパーガー店に寄りて帰り来

庭先の甘夏みかんの木下闇つぼみを持たぬ水仙の伸ぶ

コストコのカートを曳いて年末のわたしは多忙 ホットドッグ食む

想随言とひと
家咲くの花の茶山

雨音に紛れて聞こゆる鳥の声亡き人もいま時雨れているか

白亜紀の恐竜のごとく嘴太の吠えているなり初冬の街に

来る年のサプリメントを買いにゆく 山茶花ほろり冬薔薇ほろり

冬の日の空から吹きくる鼠色の風受け止めて山茶花の咲く

私が住む古家に、二本の山茶花の木がある。

昔、私たち家族四人と父母が一緒に暮らせるように家を建てたのは今から四十八年前。

私は、好きな花や木を庭に植えて楽しんだ。

十五年ほど、一緒に暮らしたが、その後いろいろあつて私たち四人が今の家を出て別居した。父母二人きりになった家の木々はその後、手入れもされず伸び放題になっていた。

私がまた、母の介護で戻ったところに、木々

は小さな森のようになり、日差しを遮るようになっていた。山茶花の二本を残し、思い切つて、他は切つたり抜いたりして処分した。

いよいよ一人の介護が限界となり、母は近くの施設に入所した。母の介護中に夫が急死し、母もいなくなり、家に一人となった時、元の住まいを処分して、今の家に暮らすことを選んだ。この間、二本の山茶花は冬になると紅色の花をわんさか咲かせてくれた。

「香蘭」とともに(6) 鈴木 桂子

——寛大だった「時代」——

私の置かれた環境は貧しくはあったが、その貧しさは結果的にマイナスには動かなかつた。ベビーブーム世代に生まれた私は、戦後民主主義という「時代」から、思いがけなくも、有り余るほど多くのかつ大きな恩恵を受けることになったからである。

私が高校生になった時、二人の兄は大学生であった。二人の大学生と高校生、病弱の父、わずかな田畑を耕してどれほどの収入があつたのか、私は知る由もなかつたが、兄達の分だけでもその負担はかなりのものがあつたと思われる。それゆえか、私の高校生活は、学費免除、同時にベビーブームの世代のために発足したばかりの、県の教育奨学生という身分を与えられてスタートした。クラスメートとの生活レベルの差は歴然としていたが、おかげで、私は余り苦勞することもなく高校生活を送ることになった。

そればかりか高校の担任は、私の窮状を鑑みて、高三在学中に大学での特別奨学金支給の確約までとってくれたのである。兄達も奨学生ではあったが、世代の差で私は、兄達の三倍近い奨学金を支給されることに。一人暮らしが十分できる額であった。おかげで私は大学に挑むことができたのである。大学卒業後も長く学究生活を続けることになるのだが、そこでも私は多額の給付を受けている。結果、自由に、好きなことを、気ままにできる、いわゆる長い長いモラトリアム期間を与えられたのだった。

そこで文学を知り、都会を知り、優れた人を知り、社会を知り、現実を知り、自分をも知つたのだが、さらに多くを学んだ。これらは私が「時代」から受けた恩恵である。高校でも大学でもその先でも私は貧しさにおいて一番であつたらしい。何事にも一番にはチャンスがある、悲観することはない、希望は抱き続けるべきである。小中高と教科書だけしか持たなかつた私に、高い学力があるとも思えなかつたが、まさに「時代」はそんな私に味方してくれたのである。

当時、貧しさはまだ美德であつた。「時代」

は貧しさを排斥するようなことはしなかつたし、チャンスは公平に与えられ、それは正當な主張でもあり得た。周囲はそれによって差別をするようなこともなく、むしろ後押しをしてくれた。「時代」は寛大だったのだ。受けた恩恵に対して私は何ができた訳ではないが、日々希望を持つて生きることができた。

しかし、その「時代」も間もなく終つてしまった。高度経済成長により豊かになった社会は、貧しさを悪徳であるかのように排斥し始めたのである。「時代」は変わり人間の価値は経済的な力によって判断されるようになった。貧しい者は社会の「厄介者」として、世間は差別の目をもって見るようになった。経済重視、効率重視の社会は、豊かさや便利さの裏に格差を助長し、若者の労働の使い捨てや貧困、自殺等を今に誘発し続けている。

私は、時代がいか様に変わろうとも、若者には希望を持ち続けてほしい、日々の中から学び続けてほしい、と思つている。結果は何かの形で必ず還る。何者かになる必要はない。ただ強く自分の人生を生き抜いてほしいと思うばかりである。それが希望につながるからである。

続・酔風船(4)

千々和 久幸

酒の自叙伝(一)

幸か不幸か酒とは相性がいい。十七、八歳の頃から飲み始めて今日まで飲み続けられるのは、やはり幸せと言うべきだろう。酒が飲めるかどうかは親の遺伝子次第、つまりアセトアルデヒドを分解する酵素を持っているかどうかだから、訓練とか努力とは直接的な関係はない。もともと環境条件もあることはある。わたしの場合は親父が「酒で命を落とすなら本望だ」という天晴れな酒飲みだったから、飲むことには端から抵抗が無かった。親父はその言葉通り肝硬変と診断され、六十歳で酒に命を呉れてやった。

わたしはと言えば、高校の修学旅行では旅館を抜けたし、悪ガキどもを引き連れて夜の京都のさる居酒屋で酔がってビールを飲んで、女将に窘められた。大学に入った当初、サークル(「駭台論潮」)の先輩に新人生歓迎コンパとかなんとか言われ、新宿の西口に連れて行かれた。それまでに飲んだことのない泡盛をコップ三杯飲まされ、嘔吐してひっくり返った。口惜しいのでその後、その店に一週間通って吐かずに三杯 飲めるようになった。

高校の古文の授業では徒然草を読み、二下部に酒飲ますことは心すべきことなり(八十七段)の下男と具覚房の顛末は知っていた。だから飲む時の相方には充分心したつもりだが、仕事上の接待とな

るとこちらに選択権はなかった。得意先ならばまだしもこれが勤務先の上司となると、サラリーマンの悲哀のドラマが始まる。

最悪の酒は絡み酒。わたしのボス(社長)はその典型だった。何せ素面では懐深くクレバーな紳士、社業の傍ら日中友好に心血を注ぎ、伊勢物語の写本の収集では日本一の蔵書家(鉄心斎文庫)。一方、政財界の繋がりには、J.C(日本青年会議所)の東京理事長(副理事長は当時ウシオ電機の創立者牛尾治朗、のちに経済同友会代表幹事)を務め、後輩には細川護熙、麻生太郎、千宗室、堤清二などきら星の如き著名人が舞めいていた。

ボスの還暦祝いにはアメリカンクラブだった。主賓は時の総理大臣たる三木武夫(明大の先輩)。バックミュージックには明大マンドリン倶楽部を配した盛大な会だった。一中小企業の社長にしては破格の祝賀会であった。

だがあろうことか、このボスの唯一の泣き所(弱点)は絡み酒。普段はまこと世故に長けた良き先輩(同学のしかも「駭台論潮」の創刊者)だったが、酔うほどに顔が青ざめて目が据わってくる。こうなると周りにいた社員が一人去り二人去り、逃げ遅れたわたしが最後まで付き合わされることになる。学識も人間としてのキャリアも桁違いだから、ただ平伏して拝聴するしかない。「おまえは教養が無い。物事を知らなさ過ぎる」「ちっとも勉強しない」「先輩や重役をバカにしておる」等々当たるを幸い薙ぎ倒される。

だが不幸にしてボスは、胃糖のため六十五歳で急逝。増上寺における葬儀ではわたしが葬儀委員長を務め、やがて会社を辞した。平成元(1989)年、春だった。

村野次郎への旅（168）

昭和期の「香蘭」（三）

今月から「香蘭」昭和二年（1927年）

二月號（第五卷第二號）を読むことにする。

表紙裏畫題字は前号同様に北原白秋、奥付の編輯兼發行者田中次郎にも変更はない。

目次から見えていけば、最初の短歌欄は次の通り十三名である。村野次郎、酒井廣治、橋本敏夫、島田旭彦、池上秋石、本間樂寛、川村浩、東朱雀、冬野木枯、石野正太郎、橋本政一、清原齊、杉浦翠子。

次いで杉浦翠子のエッセイ「的を外れた歌評に對して」が五頁に亘って掲載されている。

第二短歌欄は以下の十三名。芥子澤新之助、成田憲三、眞島勝郎、黒岩喬任、富永置三、西村孝、住吉良康、日根まもる、佐藤達夫、若林昇、加藤直一、河野紫行、村上好。

前月歌壇合評は杉浦翠子、池上秋石、橋本敏夫、村野次郎。そして如月集（短歌）に神谷葛三など十五名。橋本政一「睦月集の人々

千々和久 幸

を評す、本間樂寛「萬葉以後の新鮮味」、常磐木集（短歌）は杉浦翠子選で十四名、深雪集（短歌）は酒井廣治選で十三名、この中以後の選者大貫迪子の名前が見える。白梅集（短歌）には村野次郎選で十八名。

そして六號雜記、歌會記事、編輯後記と続き総頁数五十六。

例によつて巻頭の村野先生の作品から読んでいこう。

冬空

村野 次郎

①頼みなき人のこゝろや冬空の雲さへ寒く吹き散りにけり

②冬ざりてみざるる庭に枝ながら山茶花あかく凍りたるかも

③木枯しのひと夜あれたる沍て土にこごだこばれて青き松の葉

④ひとり居に今は慣れたりわが庭の冬木をわたる寒き日のいろ

⑤水甕に漬けておきたる根山葵の青きも今朝は凍りたるかも

先生の歌は例月は六首だが、今月は五首と一首少ない。依頼作品は別にして先生はもともと寡作である。それかあらぬか、わたしは多作を奨励された記憶はない。

さて①の歌、対人関係で何らかの齟齬があったのだからか、心ゆしまぬ歌である。こんな場合、先生は具体を明示される事はない。懊惱は自らの胸ひとつにおさめて、その心理状態を冬の雲に語らせている。

「頼みなき」（頼みなし）は一語として辞書にはないが、頼むことは出来ない、頼むに足らぬ意であろう。作品の主意は二句で終わっており、三句以下の風景に象徴される心模様をどう読むかである。結句にはなお燃る内面の悔しさが吐き出されている。

②の歌、心理詠から一転して冬景色のスケッチに変わっている。初句の「ざりて」はむしろ「近づく、来る」の意である。みぞれの降りしきる寒々とした庭に山茶花があかく凍り付いている、という印象的な光景を捉えた。

③木枯らしの通り過ぎたあとの荒涼たる光景を、松の葉を注視することによって描き出した。「五つ」は「凍つ」と同義語。「こた」は「敷多く、たくさん。非常に。はなはだ」の意。明確に言い切つて逡巡がない。

④先生は大正13（1924）年6月に輝子夫人を亡くされてから、長い一人暮らしだった。時に先生、三十二歳。慣れたりと平静を装っているが、言い知れぬ寂寥感が漂っている。

⑤の歌、村野家ではこういう食生活の習慣があったのだろう。これを風物詩と読めば冬の深さが分かる。

前月歌壇合評の今月の評者は杉浦翠子、池上秋石、橋本敏夫、村野次郎である。

日光

俄雨降りて止みたり夕庭にひとときひびく
こほろぎのこゑ

朝くもり深き空より目に見えて霧降り來たる心かなしも
三ヶ島葎子

（翠子）三ヶ島さんは現在の女流歌人中でその堅實さに於いて私は尊敬しておりますが、この二首は傑作ではない。

（一）は所謂、型にはまつたお歌です。格調に

於いて殊に然う思はれます。但し「ひびく」と云ふところに私は注意して見ましたがどうもそれだけの功を奏してないと思ひます。

（二）はその感情の複雑さは見えます。但しやはり成功して居りません。一二三四句までは忠實に物を支えて來ながら五句でどかんと落して了つたと云ふ風です。四句までが描寫になつて居ることはこの一首の九分九厘まで描寫的であるとも云へます。それがほんの一分だけの領分で主観を表はしたところが、見る物の心持にそくはないところですか。これは全々描寫で行つた方がよくはないでせうか。或は「心」と云ふ字を除いて「かなし」をすぐに「來る」に着けて、「霧降り來るかなしかりけり」にでもしたらどうでせうか。

（秋石）（一）は平凡である。（二）は結局は説明である、二首共女らしさのうかゞはれる作だが、いゝ歌ではない。

創作

札幌郊外藻岩にて

わが丈をこえむばかりの藤袴色にこそに
ほへすさまじきかな
秋草の荒きを見れば親しめず今日のわが
身はおきどころなし
若山喜志子

（翠子）作者は女流歌人として既に定評ある方で、私もこれまで幾度かその秀歌を見せられました。しかし、この二首ともに失敗作であると思ひます。須く點を甘くするならば所謂、大陸的風土に對する感情が受取られてゐるとも言へます。けれど、かう云ふ出かたでは非難される點が随所にあるのを免かれませんか。

（一）のお歌の結句は一年生の歌人が、言葉の貧しさに訴へ出る遣方です。

（二）は一二句を讀むときこれは秀歌だと思つてゐる内に三四五句で急轉的落膽をしました。私にその「秋草の荒きを見れば」を賜らば「秋草の荒きを見れば蝦夷の國こゝに歩みのとゞまらなくに」と作りませうか。

（秋石）（一）全體が概念的に走つてゐる歌だ、男々しく詠んでゐるが力が出てゐない。（二）は秋草の荒きは北海道獨特の感じかも知れないが自分には分からない。

二首共ある程度の力強さはあるが、夫れだけでは物足りない。

この櫛の厳しきは歌壇の呼び物になつたのではあるまいか。続きは次号に譲る。